

『別れは新たなはじめの時』

現在は、お通夜が「通夜式」と呼ばれ、セレモニー・式典となつてしまいましたが、お通夜は、「夜伽」とも呼ばれていました。

「夜伽」とは、夜という字にお伽話の伽と書きまます。伽には「そばについて相手をする」という意味があり、もともと、通夜・夜伽とは「看取り」を表す言葉でした。

夜を通して、人生の最期を看取つていく。傍につき、最期の想いに、その生涯に、心を寄せていく。ひとは、いのち終わろうとする時、何を考え何を思うのか…。遺された私たちが、その想いを訪ねていくのです。

世間の言葉に「会うは別れのはじめ」という言葉があります。

なぜ人は別れていかなくてはならないのか。

出会った者には必ず別れがあり、生まれたものには必ず死が訪れる…。私たちは平生、憎しみあつたり争つたり、必ずしも円満で平穏な生活を送っているわけではない。しかし、別れの時には、なぜか、怒りや不満であつても、そのままが懐かしい思い出ともなり、別れを通して、はじめて故人と、素直に向き合うこともできるのです。

別れの悲しみは変わることはありませんが、別れを通して出遇つていく世界があるのです。

「あなたの大切な方はどこへ往かれたのでしよう…。」
私たちは、人間の一生を旅に譬えることがあります。

この世に生まれたことが、旅の始まりであるならば、いのちの終わりに至る過程は、家への帰路でしょう。しかし、旅は旅でも、帰る家のない旅ならば、それは不安な「放浪の旅」と言わねばなりません。人生の意味もわからず、いのちの行方も知らず、さまよい続ける、私たちの行き先を、阿弥陀さまは「お浄土」と定めて下さるのです。

阿弥陀さまは「死」を空しい滅び、いのちが消えていくとしか思えない私に「安心して、わが国・お浄土へと生まれて来い」と言われるのです。

浄土真宗では「死」を終わりとは考えません。阿弥陀さまに抱かれ、お浄土へと生まれ、仏さまとして、私を導いて下さる方になられたのです。

故人は、お念仏申すところに、いつも私と一緒にいて下さいます。

本日のお通夜のご縁、ご一緒に故人を訪ねて参りましょう。